
ブラックジャックの消息

南 晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラックジャックの消息

【Nコード】

N00970

【作者名】

南 晶

【あらすじ】

心臓の病気で休んではかりの達也のあだ名はブラックジャック。手術の傷痕があだ名の由来だ。

席が前後だったため連絡係だった恵が、冥途の土産にお願いされたのは彼の最初で最後のデートだった。

第1話（前書き）

ちよつと切ないお話を書いてみました。

楽しんで頂ければ幸いです。

ちなみに舞台は筆者の地元です。

第1話

東山中学2年3組の黒田達也の席は今日も空いていた。

その前の席に座っている木下恵は、当てにしていた達也の宿題を写すことができなくなり、休み時間を返上して必死で問題を解いている。

生まれつき心臓に欠陥がある達也は、小学校の時から入退院を繰り返しているにも関わらず、成績は常にトップ。

名前の順序で常に達也の前に座っている恵は、常に達也の頭脳を当てにして生きてきた。

それ故、突然達也に休まれると予定が狂ってしまふ。

やがてチャイムが鳴り、大柄な鈴木先生が大股で教室に入ってきた。
タイムアップ。

恵は宙を仰ぐ。

「昨日だした宿題、回収するぞ！今頃ジタバタするな！」

鈴木先生の怒鳴り声が教室に響いた。

「恵、今日もジャックのウチに行くの？」

帰宅時間になって、校門を出ようとしたところ、香奈が恵を呼び止めた。

ジャックとは今日休んでいる黒田達也のことだ。

「行くよ。小学校からの行事だからね。あいつが休んだらノート届けに行くの。」

「そっか、家、近いんだ。」

香奈は興味深そうに突っ込んでくる。

「近いよ。名前も近いしね。」

恵は無表情に返事をする。

「ジャックと付き合ってるの？」

「は？」

好奇心一杯の香奈に恵は冷たい視線を投げ、無愛想に返事をした。

「あいつはいつも生死の境を彷徨ってるからね。そんな余裕ないと思うよ。」

何故、黒田達也がジャックと呼ばれているかというと、それは彼が小学校の頃、いじめられていたことが原因だった。

休みがちで、体育の授業にも参加しない達也が成績がいいのを「ガリ勉」とからかう輩がいた。

その日も教室で座って本を読んでいた達也の周りに男子生徒が集まってきた、いつものようにからかい始めた。

「お前ホントに入院してんのかよ。サボッて家でカテキョーつけてんだろ。」

「ボンボンは違うな。」

達也は表情も変えず、本を読んでいる。

「おい、すかしてんじゃねーよ。」

達也の読んでいた本を生徒の一人が取り上げた。

見るに見かねた恵が、割って入ろうとしたその時、突然達也は椅子から立ち上がり、いきなり着ていた体操シャツの上着を脱ぐと床に叩きつけた。

恵からは達也の背中しか見えなかったが、からかっていた生徒達は、達也の上半身を直視する羽目になった。

達也を見た生徒達の顔が引きつって硬直している。

「入院してたよ。手術もやった。これが証拠。分かったら本返せよ。」

そう言つて達也は体操シャツを拾つてまた着ると、生徒の手から本を奪い返して何も無かつたように席についた。

達也の背中側にいた恵は見れなかったが、彼の胸部は度重なつた手術の為にツギハギだったのだという……。

その日から彼のあだ名はブラックジャックになった。

事件は小学校の7怪談の一つになり、中学校になった今でも彼はジ

ヤックと呼ばれている。

第2話

達也の家のインターホンを押すと、達也の声がした。

「木下？ああ、ノートか。悪いな。今開ける。」

玄関のドアが開き、Ｔシャツにジーンズの達也が出てきた。

「なんだ、元気じゃん。何で休んだのよ。お陰でこっちは・・・。」

ブツブツ言い出した恵を見て、達也は笑った。

「宿題はそろそろ自分でやれよ。本来そついうもんだろ？」

「分かってます。はい、ノート。」

無愛想に恵はノートを渡す。

受け取りながら達也は言った。

「時間あつたら入る？かあさん、もうすぐ帰ってくるし。」

「・・・明日の宿題教えてくれるなら。」

そついいながら恵はもう靴を脱ぎ始める。

恵は達也の部屋が好きだった。

科学の本やら、パイロットが主人公の戦争マンガやら、プラモデルやら、男の子の部屋は見慣れぬものばかりで興味が尽きない。

そういえば恵が少女マンガを読んでいた小学校の時、達也は大人が読む文庫本を持ち歩いていていた。

子供の頃から大人びていた達也は常に自分より何年も先を歩いていたような気がする。

整頓された勉強机の上には参考書や辞書が置いてある。

「なんだ、勉強してんじゃん。」

恵は少しふてくされた。

恵が授業中黒板を写したノートより、よっぽどレベルの高い参考書だった。

やがてジュースとグラスをトレイに載せて達也が入ってきた。

「何？」

机の上を物色している恵を見て達也は不審な顔をする。

恵は慌てて両手を挙げて言った。

「何でもない。元気なのに何で学校来なかったん？」

「・・・ああ、寂しかった？」

ジュースを注ぎながら達也はニヤリと笑って見せた。

「ばっ、ばっかじゃないの？あんたが来ないと困るんだって。」

恵は赤面しながら言い訳をする。

動揺しているのがバレバレだ。

達也は恵に椅子を勧め、自分はベッドに腰掛けた。

「宿題くらいやれよ。オレがいなくなっても知らないよ。」

「分かってるって。しつこいなあ。でもいなくならないでよ。」

二人は顔を見合わせた。

達也の切れ長の目がじつと恵を見つめていた。

子供の頃は女の子みたいだった達也の顔が最近少し男らしい。

少し前までは甲高い声だったのに、今は少し低いハスキーな声だ。
変声期の途中の少しかすれた声。

恵は何だか恥ずかしくなって、目を逸らした。

それでも達也はまっすぐ恵を見つめて、思い切ったように口を開いた。

「木下、オレが死んだらどうする？」

「・・・は？」

恵はぎよっとして顔を上げた。

ロマンチックなムードは一気に吹き飛んだ。

「今日、病院に検査に行ってたんだ。で、また手術することになった。成長に合わせてしなきゃならないんだって。」

達也は表情を変えず、淡々と話した。

恵は何と言っていていいかわからず、黙って達也を見つめる。

「もう、何度もやってるんだ。子供の頃から。でも、今でも運動も

できないし。色んな制限があるんだ、この心臓は。だから今度やったところでどうなるか分かんないけど。」

「・・・いつ？」

「来月。だからしばらく学校には行けない。で、多分留年するよ。出席日数足りなくなる。」

達也は溜息をついてから少し笑った。

「だから、木下ともお別れかな。手術して死ぬかも知れないし、生還しても一緒に進級できなくなりそうだ。」

恵は言葉が見つからず、ただ達也の口の動きを見ていた。達也は続けた。

「で、木下に聞きたいんだけど。オレがいなくなったらどうする？」

「・・・どうするって・・・。そんなの信じられない。」

「でも、ホントだよ。手術する時はいつも死ぬかもしれないって思う。木下はオレいなくなったら寂しい？」

「・・・さ、寂しいよ・・・。」

言うなり、恵の目から涙が溢れた。

ボタボタ零れ落ちる涙が恵の制服のスカートを濡らす。

小学校の時から後ろの席にいた達也がいなくなる。

今まで考えたこともなかった事態だ。

ましてやこの世からいなくなるなんて。

考えただけで涙が溢れてくる。

「へ、変なこと言わないでよ。縁起でもないじゃん、そんなの。」

本格的に泣き出した恵に、達也は優しい顔でタオルを渡した。

「サンキュ。嘘でも嬉しい。死なないように手術頑張るよ。」

恵は渡されたタオルに顔を埋めて嗚咽を堪えていた。

やがて達也は泣いている恵の髪に手を触れた。

顔を恵の耳元に寄せ囁く。

達也の息が肌に触れて恵の胸がドキンと鳴った。

「今までの宿題のツケ、払ってもらっていい？」

恵が涙に濡れた顔を上げると、至近距離に達也の笑った顔があった。

「・・・ツケ？」

「そう、今まで宿題手伝ってやったでしょ。そのお返しを要求する。」

いたずらっぽく達也は恵を睨む。

恵は不信感も顕わに眉間に皺を寄せた。

「なによ。この期に及んでそんなもん請求する気？」

「いいじゃん。これがホントの冥途の土産だ。」

笑える話ではないのに、達也は笑いながら言った。

「1回だけ、オレとデートしてよ。」

第3話

次の日曜日、恵は達也に言われたように駅の改札口で待っていた。

「1時に待つて。」

達也は言ったが、何故その時間なのかどこに行くのかも聞かされてなかった。

恵にとつても、男子と二人で出かけるのは初めてだった。

考え抜いた末、お気に入りのチェック柄のマキシ丈ワンプにデニムのジャケットを着てみた。

長い髪はポニーテールにしてみた。

精一杯のおしゃれだったが、やがて現れた達也のいでたちを見て恵はがっかりした。

彼はいつもどおりのTシャツにジーパンといういでたちだった。

「木下？間違えたな。誰かと思った。しかも背伸びた？」

達也は恵に近づくなり見上げるようにして言った。

小柄な達也は、恵の履いてきたヒールの高いサンダルのお陰で、恵とほぼ同じ身長になっている。

褒めて欲しいところはそこではないのに。

恵は少しムカついた。

「あんたが小さくなったんじゃない？」

「まさか。小さいのは生まれつきだよ」

達也は笑いながら言って、恵の手を取った。

突然の達也の手の感触に恵の鼓動が大きくなった。

「切符買ってある。行こう!」

達也は恵を引っ張りながら改札を通った。

ホームには赤い4両編成の電車が停車している。

昔の電車みたいに長い座席が通路をはさんで左右に向かい合うように並んでいる。

二人はまだ人の少ない4両目の車両に入って腰を下ろした。

まだ、達也は恵の手を握ったままだ。

恵はオズオズと口を開いた。

「・・・あの〜。」

「え?」

「どこ行くのか聞いてないんだけど。」

「ああ、ごめん。海行こうと思って。」

「今から?」

「だって海って言ったら夕日でしょ?」

達也は自信に満ちた顔で答えた。

やがてホームにアナウンスが流れ、電車の扉が閉まった。

バスの方が早いのではないかというスピードで電車はのろのろと進んでいく。

ガタタン、ガタタンと規則的な音が座席から振動になって響く。窓から吹き込む風が頬に当たって心地よい。

恵は移っていく景色を眺めた。

町の風景からだんだん田んぼの緑が広がっていく。

「悪いな、変なこと頼んじゃって。」

突然、達也がぼそつと言った。

「今まで付き合い長かったから。最後に話したかった。」

「・・・あたしも。黒田君がいていつも助かったよ。」

「木下いつもオレの前で寝てるんだからな。先生に怒られないかこっちが気になるってんだよ。」

「そんなに寝てないでしょ。」

不思議な感覚だった。

今までも一緒にいた筈なのに、私服の彼は初めて会う人みたいだった。

「なんかさ、死ぬのかなって思ったら最後に一回くらい人並みなこととしておきたくなったんだよね。」

「・・・それがデート？」

恵は思わず吹き出した。
達也は赤面して抗議する。

「何だよ。こっちは切実なんだよ。女の子とデートしたこともなかったら、なんか天国で恥ずかしいかもしれないじゃないか。」

「恥ずかしいって誰に対してよ？」

「神様とかさ。心配すんじゃないの？かわいそくに、非モテのまま死んじゃったのかつて。」

「意味分かんないし。でも、秀才の黒田君も普通のこと考えるんだね。」

恵はケラケラ笑った。

いつも大人びて落ち着いていた達也に少年らしい欲求があったのは、意外だったし嬉しかった。

「オレはいつも普通だよ。学校行かないから皆誤解してるけど。」

赤面したままふて腐れた様に達也はぶつぶつ言った。

次は三河田原、三河田原……

アナウンスが車両に響いた。
達也は照れ隠しに勢いよく立ち上がる。

「降りるよ。こっから更にバスに乗る。」

恵に向かって手を差し出す。

恵は嬉しくなってその手を取った。

「黒田君は亭主関白になりそうだねえ。」

「だって、デートは男がエスコートするんだろ？」

達也は首を傾げる。

ははあ、さてはなんかの受け売りだな。

勉強熱心な達也は女性誌でも読んで、デートマニュアルを実行しているに違いない。

ニヤニヤする恵を見て達也は戸惑った表情をする。

「・・・オレなんか変？」

「いや、別に。行こう！」

今度は恵が達也の手を引いて電車を降りた。

第4話

30分くらい走っただろうか。

バスの最終停車所で二人は降りた。

閑散としたバス停は、海水浴シーズンには賑わうであろう土産屋の前にあつた。

道路を挟んだ向こうにはコンクリートの堤防があり、灯台らしき建造物も見えた。

「海、見たかったんだよね。何となく。」

ポツリと言うと達也は恵の手を引いたまま、誘われるように歩き出した。

潮風の香りがして、海岸独特のベタつとした空気が体を包む。

二人は堤防の小さな階段をよじ登った。

途端、目の前に真っ白な砂浜と真っ青な海が広がった。

強い潮風が二人の髪を吹き上げた。

「サイコーじゃん。来て良かったね。」

テンションの上がつた恵は堤防から飛び降りると砂浜を走り出した。ヒールの高いサンダルを脱ぐと温かい砂に素足が埋まる。

達也はゆっくり降りて来るとスニーカーと靴下をおもむろに脱いだ。

子犬のように興奮して恵は砂浜に転がった。

「黒田君も寝てみれば？」

「オレは急に走るのダメなんだって。発作が起きてここで死んだら、

お前どうやってオレの体持って帰るんだよ？」

恵ははっとして起き上がった。

達也の心臓の病気のことはいつも忘れてしまう。

のろのろと横に座った達也に恵はすまない顔をしてみせた。

「ごめん、忘れてた。」

「いいよ。むしろ忘れてくれ。」

二人は砂にまみれてその場に寝転がる。

真っ青な空に白い雲がどんどん流れていく。

ドー・・・という海鳴りが腹に響いてくる。

恵は首を横に向けて達也の顔を見て言った。

「あたしたち、付き合ってるの？」

「えっ？」

ぎょっとして達也も顔を向ける。

「だってこれデートでしょ？この前、香奈に聞かれたんだ。ジャックと付き合ってるのかって。」

達也は怪訝そうな顔をして聞き返す。

「・・・ジャックって誰？」

言われて恵はあっと口を塞いだ。

そうだ、このあだ名は本人だけは知らなかったんだ。

当然か。

でも、もう時効かな。

恵は決心して言った。

「黒田君のこと皆ブラックジャックって呼んでるんだよ。だから略してジャック。小学校からだけど気が付かなかった？」

「・・・なんでブラックジャックだよ？」

「小学校の時、絡まれた時にシャツ脱いだことあったじゃん。あれから。」

達也はああ、とやっと腑に落ちた顔をした。
手を胸に当ててみせる。

「これのこと？」

「そう。あたしは後ろにいたから見てないけど。傷跡がすごくてブラックジャックみたいだったさ。」

怒り出すかとヒヤヒヤしていたが、意外にも達也は笑い出した。

「うまいこと言うなあ。全然知らなかったけど、光栄だね。オレ外科医になりたから。」

「へえ？」

初めて聞く達也の夢だった。

「なんで？」

「よくある話だけど、オレ何度も手術してるじゃん？その時の先生がなんかカッコよく見えてさ。子供心にこんな大人になりたいって思ったんだよね。」

「へえ」

恵はせつなくなつた。

将来の夢を語る達也は死ぬかも知れない覚悟で今ここにいるのだ。その夢は叶わないかもしれないのに。

「無理だと思つた？」

思つたことが顔に出たのか、突然達也が聞いた。

「う、ごめん。そういう訳じゃ……。」

「謝るなよ。お前分かりやすいんだよ、顔が。」

笑いながら達也は優しく言った。

「木下さあ、変なこと聞くけど、生理きた？」

「……はっ？」

突然の質問に恵は赤面して飛び起きる。

「な、何言ってるのよ？ 今までの話と関係ないしっ！」

あははと達也は恵の動揺ぶりを見て笑った。

「うん、聞いただけ。オレは外科医になるどころか、まず大人になるのが目標だからさ。女の子は早く大人になれていいなって思っただけ。」

ニヤニヤして達也は言ったが、恵にはそれが泣いているように聴こえた。

「つまりさ、オレ今でも小さいし、運動もできないし、体も貧弱だし。早く大きくなりたいけどそれどこじやなくなってきたしね。木下だってこんなのと付き合ってるって思われたら迷惑だろ？ だから、香奈には否定しとけよ。ジャックとは付き合ってないって。」

恵は座ったまま膝を抱えて、達也の言葉を聞いていた。
しばらくの沈黙の後、恵はゆっくりと言った。

「・・・黒田君はかっこいいよ。」

仰向けに寝たままの姿勢で達也は恵を見上げる。

「あの時、上着脱いで怒鳴った時、すごくカッコよかった。頭いいのも努力してるからでしょ？ それもかっこいい。小さいけど、病気と戦ってる体もかっこいいと思う。」

恵は達也の顔を覗き込んだ。

そのまま体がかがめて顔を近づけ、そっとキスをした。

お互いの乾いた唇の感触が伝わる。
達也は切れ長の目を見開いて硬直した。

「ねえ、あたしにもブラックジャックの傷見せて。」

呆然とする達也のシャツをそつと上げると痩せた胸部が顕わになった。

白い肌に痛々しい傷が確かにある。

恵はその傷にもそつとキスした。

達也の体がビクつと反応する。

耳を当てると達也の速い鼓動が聞こえた。

達也が生まれたときから何度も手術してきた心臓の音だ。

「頑張つてね。」

恵は達也の心臓に向けて声を掛けた。

そして彼の顔をまた覗き込む。

達也は目を見開いたまま呆然として、されるがままになっていた。
その顔を見下ろして、恵は笑った。

「もう、大丈夫。あたしが達也の心臓様をお願いしといたからね。」

「……びつくりさせるなよ。発作がおきるかと思った。」

言うなり、達也は恵の腕を掴んで引き寄せた。

二人は砂浜の上で横になったまま抱き合い、そして何度もキスをした。

砂が髪や顔に張り付くのも構わず、二人は固く抱きしめあった。

いつのまにか水平線の彼方に沈み始めた夕日が、砂まみれになった

二人の顔をセピア色に照らし出した。

第5話

その後、予告通り達也は学校に来なくなった。

名古屋の専門医がいる病院に入院したらしいが、彼が再び戻ることはなかった。

達也の心臓はもう限界だったそうだ。

生まれたときから成長に対応できないと分かっていたらしい。

恵は達也の母親から、葬儀も全て終わった後に聞かされた。

「いつも連絡帳ありがとう。」

痩せてしまった達也のきれいな母親は恵にそう言った。

葬儀には学校の誰も呼ばれなかったし、学校から彼の死についての報告もなかった。

彼が死ぬ少し前に転校届けが出されていた為、死んだ時には生徒として在籍していなかったことになっていたからだ。

達也が自ら希望してしたことだろうと恵は思った。

そうでないと、恵の後ろの席には白い菊の花瓶が置かれることになっただろう。

そうなる前に彼の机は撤去されていた。

恵はそれがありがたかった。

あたしたちのことは誰も知らない。

でも、恵は満足だった。

だって達也は、冥途の土産に恵とのデートの思い出を持っていった

んだから。

エピソード

手術台に寝かされたまま、恵が思い出すのは何故か達也のことばかりだった。

30才になって初めてした人間ドックで胃にポリープがあることが分かり、早急に手術をすることになったのだ。悪性だったらそれは癌ともいう……。

初めて乗った手術台は処刑場のようで、そこに括り付けられている自分はまさにまな板の鯉だ。

手術室の外には、夫が3歳になったばかりの娘を抱いて待っている。今、死ぬ訳にはいかない。

大した手術ではないと言われているが、不安で涙が出てくる。こんな恐怖を達也は何度も経験してきたのだ。

そのうちだんだんと頭がぼんやりしてきた。さつき打たれた麻酔が効いてきたのだろう。そのまま意識がなくなるのが怖くて、恵は必死で目を見開いた。

「怖がるなよ、木下。」

聞き覚えのある突然の声に恵はぎょっとした。恵を見下ろすように、手術用のモスグリーンの上着と帽子を着衣した医師が立っている。

「……黒田君？」

医師はマスクから出た目だけ笑って見せた。

「あの時のデートのお礼。守ってやるから頑張れよ。」

まだ高い、ハスキーな声で医師は言った。

恵は驚きの余り、思わず起き上がった。

「いつ生きてたの？医者になったの？」

恵の大声に手術室にいた看護師や医療スタッフが一齐に振り返った。

「もう麻酔が効いてるでしょう。動かないでくださいよ。」

達也の声で喋った医師が、やれやれといった顔で、さっきとは程遠いしゃがれた低い声で注意した。

訳が分からないまま、恵はまた手術台に寝かされた。

麻酔のせいで夢でも見たのだろうか。

だが、不思議とさっきまでの恐怖感が消えていた。

不安定だったベッドが温かい毛布で包まれたような安心感を感じた。やがて強烈な睡魔に襲われ、恵は目を閉じた。

もう大丈夫。

きっとブラックジャックはここにいるんだ。

あの日のままの姿で、あたしのことをのんびり待っているに違いない。

薄れゆく意識の中で恵はそう思った。

そして、心穏やかなままに恵は眠りについた。

エピソード（後書き）

お付き合いありがとうございます。
お疲れ様でした。

楽しんでいただけましたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0097o/>

ブラックジャックの消息

2011年5月21日02時08分発行